漱石山房

# 漱石山房秋冬

～漱石をめぐる人々～

SHINJUKU
新宿区

# 目次

漱石の生涯 02
漱石早わかり年譜 04
-等身大の漱石-
吾輩は漱石なり 06
Inside Story
名作誕生、その時漱石は…。 08
漱石山房の記憶 14
漱石早わかり交友相関図 18
漱石と木曜会 20
歩いて体験 漱石散歩ガイド
漱石の散歩道 25
漱石三択クイズ 30
参考文献

# 新宿ゆかりの文豪 夏目漱石の世界へ

新宿区は、夏目漱石が生まれ育ち、
その生涯を閉じたまちです。
晩年の九年間を過ごした早稲田南町の家では、
作家として本格的な執筆活動を開始し、
数々の名作を世に送り出しました。
この家は「漱石山房」と呼ばれ、
今でも人々の記憶に刻まれています。
現在新宿区は、この「漱石山房」の復元に向けた取り
組みを進めています。
この小冊子では改めて新宿ゆかりの国民的文豪・
夏目漱石を広く紹介してまいります。
夏目漱石の、人生、人間的魅力、作品、
そして彼をめぐる人々など、
漱石の世界へご案内いたします。

# 漱石の生涯

## 不遇の少年時代

夏目漱石は慶応三年（一八六七）二月九日、牛込馬場下横町（明治以降は、喜久井町）に、父夏目小兵衛直克と母千枝の五男として生まれました。時代はまさに幕末の混乱期、その年の十一月九日に徳川慶喜が大政を奉還、翌年には戊辰戦争、上野の山では「官軍」と「彰義隊」のすさまじい戦闘が行われています。

庚申の日の申の刻に生まれた漱石は、一つ間違えると大泥棒になる、ただし名前に金の字か金偏の字を選んで名づければ難を逃れるという迷信から、「金之助」と名づけられたと伝えられます。

生家は町方名主で、中里町・天神町から馬場下あたりまで十一カ町を治めていた家柄でした。父は維新後も区長を務め、「喜久井町」の名前も夏目家の家紋「井桁に菊」にちなんで命名、また「夏目坂」の坂名も名づけたといわれています。漱石は『硝子戸の中』という作品の中で、子供の頃の記憶から生家のあたりを寂れ切って淋しい、辺鄙なところだったと描写しています。

漱石の幼年期は家庭的には恵まれないものでした。漱石は後年、森田草平に「俺は六人の末子で、両親から余計者、要らぬ子として扱われたものだ」と言っています。実際、生まれてすぐに四ッ谷の古道具屋に里子に出され、すぐに戻されたものの、今度は内藤新宿の門前名主塩原昌之助の養子に出されています。漱石が生まれた時、すでに両親は高齢で子供が多く、さらにこの頃から家運が傾き生活が苦しくなっていたことがその理由と考えられます。

5歳頃の金之助
明治4年（1871）12月に浅草寺に参拝したあと「七五三」の五歳の祝いに撮影したという

母・夏目千枝

父・夏目直克

## 英語教師から小説家へ
## 文豪・夏目漱石の誕生

明治八年（一八七五）末、塩原夫婦は離婚、八歳の金之助は塩原籍のまま夏目家に戻されます。戸田学校から市ヶ谷学校へ転校、その後錦華学校を経て、東京府第一中学に進みます。学業は常に優秀でしたが、学校の授業に飽きたらず第一中学を中退し、好きな漢学が学べる二松学舎に入学します。ここで漢籍を多く読み、文学に興味を抱き始めたといわれます。

しかし、長兄の大助から文学は職業にならないと止められ、自分でも大嫌いだった英語を重要だと考えるようになります。十七年九月に大学予備門に入学。当時の漱石は寄席通いを楽しみ、水泳、ボート、器械体操などの各種スポーツにも熱心で、勉強に身が入らなかったようです。十九年七月に腹膜炎にかかり、留年を余儀なくされます。このときから勉学に力を入れるようになります。

二十一年、第一高等中学校本科第一部（文科）に進学します。正岡子規とはここで出会い、共通の趣味である寄席の話題などを通じて親交を深めていきます。気難しかった子規も、漱石とは相性がよく、「談心の友」「畏友」と呼んでいます。

二十二年五月下旬、子規の和漢詩文集『七艸集』の巻末の評に、初めて「漱石」の号が用いられます。前年に塩原家から夏目家へ復籍もしており、ここに晴れて「夏目漱石」が誕生します。漱石二十二歳の時のことです。

帝国大学卒業後は、東京高等師範学校、愛媛県尋常中学校、熊本の旧制第五高等学校と、英語教師として勤め、三十三年から英文学研究のためにイギリスに留学。帰国してからは東京帝国大学の講師に就任しました。その頃、高浜虚子に勧められて書いた『吾輩は猫である』が評判になり、『坊っちゃん』『倫敦塔』などを発表し始めます。朝日新聞社に入社した後は、早稲田南町の「漱石山房」で本格的に作家活動を開始し、『三四郎』『それから』『こゝろ』『道草』などの作品を書き続け、『明暗』の執筆途中にあって四十九歳の生涯を閉じます。

東京大学予備門時代
前列左より二人目が漱石

若い日の漱石の肖像

# 漱石早わかり年譜

| | できごと | 居住地 |
|---|---|---|
| 慶応三年（1867）0歳 | 二月九日、江戸牛込馬場下横町（現・新宿区喜久井町一番地）で誕生。古道具屋に里子に出されるがすぐに連れ戻される。 | 牛込馬場下横町 |
| 慶応四年（1868）1歳 | 内藤新宿の名主、塩原昌之助の養子になる。 | 内藤新宿北町裏十六番地 |
| 明治三年（1870）3歳 | 疱瘡（ほうそう）にかかり、薄く痘痕（あばた）が残る。 | 浅草三間町 |
| 明治四年（1871）4歳 | 休業中の妓楼（ぎろう）伊豆橋に住む。 | 内藤新宿北町 |
| 明治七年（1874）7歳 | 戸田学校下等小学第八級入学。 | 浅草寿町 |
| 明治九年（1876）9歳 | 養父母の離婚により塩原姓のまま夏目家に引き取られる。市ヶ谷学校（現・愛日小学校に統合）に転校。 | 牛込喜久井町 |
| 明治十一年（1878）11歳 | 錦華（きんか）学校小学尋常科第二級後期に転校し、卒業。 | |
| 明治十二年（1879）12歳 | 東京府第一中学（現・日比谷高校）に入学。 | |
| 明治十七年（1884）17歳 | 東京大学予備門予科に入学。 | 小石川新福寺 |
| 明治二十一年（1888）21歳 | 夏目家に復籍。第一高等中学校本科英文科に進学。 | |
| 明治二十二年（1889）22歳 | 正岡子規と親交を深める。子規『七艸集』に「漱石」と署名。 | 牛込区牛込喜久井町 |

大学予備門　中学校　小学校

正岡子規　明治20年（1887）第一高等中学校（のちの第一高等学校）時代

漱石（左）と米山保三郎（帝国大学文科大学時代）

漱石（右）異母姉ふさの夫・高田庄吉（中）と次兄・栄之助

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正五年（1916） | 明治四十四年（1911） | 明治四十三年（1910） | 明治四十年（1907） | 明治三十八年（1905） | 明治三十六年（1903） | 明治三十五年（1902） | 明治三十三年（1900） | 明治二十九年（1896） | 明治二十八年（1895） | 明治二十六年（1893） | 明治二十五年（1892） | 明治二十三年（1890） | |
| 49歳 | 44歳 | 43歳 | 40歳 | 38歳 | 36歳 | 35歳 | 33歳 | 29歳 | 28歳 | 26歳 | 25歳 | 23歳 | |
| 十二月九日胃潰瘍が悪化し、死去。 | 文学博士号を辞退。 | 伊豆修善寺で大量吐血、危篤状態に。 | 一高・帝大を辞し、朝日新聞社入社。月給200円<br>早稲田南町に転居（漱石山房）。 | 「吾輩は猫である」を『ホトトギス』に発表。 | 第一高等学校英語講師（年俸700円）、東京帝国大学英文科講師（年俸800円）を兼任。神経衰弱が悪化。 | 正岡子規死去。帰国の途につく。 | 英国留学。学費年1800円給付／留守手当年300円 | 熊本の第五高等学校に赴任。鏡子と結婚。月給100円 | 愛媛県尋常中学校の嘱託教員として赴任。月給80円<br>中根鏡子と見合い、婚約。 | 帝国大学大学院に進学。<br>東京高等師範学校英語嘱託となる。月給37円50銭 | 東京専門学校（現・早稲田大学）の英語講師となる。 | 帝国大学文科大学（現・東京大学）英文科に入学。 | |
| 朝日新聞社社員 | | | 大学講師 | | | 英国留学 | | 高校講師 | 中学教員 | 大学院 | 大学 | | |

牛込区矢来町
三番地中の丸
本郷区駒込千駄木町
五十七番地（通称 猫の家）
本郷区本郷西方町十一ろ-七
九月～牛込区早稲田南町
七番地（漱石山房）

『吾輩は猫である』（三十八年）
『坊っちゃん』（三十九年）
『虞美人草』（四十年）
『三四郎』（四十一年）
『それから』（四十二年）
『門』（四十三年）
『彼岸過迄』（四十五年）
『こゝろ』（大正三年）
『道草』（大正四年）
『明暗』（大正五年・未完）

※詳しい作品年譜は13ページを参照。

漱石山房の書斎で　大正3年（1914）

熊本市
ロンドン

明治33年（1900）6月　英国留学を命じられて熊本を去る際に、書生として住み込んだ五高生たちと

小石川法蔵院
松山市

駒込千駄木町の家（通称 猫の家）

第五高等学校の卒業記念写真
中列左から3人目が漱石

# 吾輩は漱石なり

## ―等身大の漱石―

### 結婚 28歳でお見合い、神楽坂ですれ違う

お見合いの相手は貴族院書記官長中根重一の長女鏡子（十八歳）。たくさんのお見合い写真を見て目の肥えていた鏡子にも写真の漱石は好ましく映ります。実際会ってみると鼻の頭にあばたがあり、目のやり場に困ったそうです。いっぽう漱石のほうは、兄たちに聞かれて「歯並びが悪くてきたないのに、それを隠そうともせず平気でいるところがたいへん気に入った」と答えて笑われています。

この二、三日後に神楽坂で、人力車に乗った二人が遭遇します。しかしお互い相手のほうから声をかけるものと思って待ちかまえているうちに、そのまますれ違ってしまったというエピソードも伝えられています。その翌年、熊本での新婚生活が始まります。

### 父親 漱石、出産に立ち会う

明治三十二年（一八九九）の長女筆子誕生から、ほぼ一年おきに七人の子供が生まれています。四女愛子の時には産婆が間に合わず、漱石も出産を手助けすることに。身動きのとれない夫人に代わって脱脂綿で赤ん坊の顔をつかまえようとするのですが、とらえどころがなく四苦八苦しているところに産婆が到着して事なきを得ました。

普段は子供が幼稚園で作った工作を見たり、相撲をとったり、百人一首を一緒に興じる優しい父親の一面を見せています。しかし一旦神経衰弱に陥ると「突然怒る恐い父」であったと、子供たちの記憶に焼き付いて離れなかったようです。

本名：夏目金之助
職業：作家（朝日新聞社社員）
出身地：牛込馬場下横町（現・新宿区喜久井町1番地）
身長：158.8cm（5尺2寸4分）
体重：53.3kg（14貫200匁）
※明治23年3月（23歳）の身長体重＊1
家族構成：妻鏡子、筆子、恒子、栄子、愛子、純一、伸六、ひな子（夭折）
趣味：器械体操（東京大学予備門時代）、落語、講談、水彩画、謡い
ペット：黒い猫（名前はない＊2）、犬（ヘクトー＊3）、文鳥

＊1　現代からすると小柄であるが、当時の成年男子としては平均よりやや良好な体格であった。
＊2　『吾輩は猫である』のモデルとなった黒猫は明治41年に死んでいる。漱石は死亡通知を門下生たちに送った。また十三回忌に鏡子夫人により供養塔が建てられる（現在の供養塔は再現したもの）。
＊3　『硝子戸の中』に登場する犬。トロイの勇将の名前「ヘクトー」は漱石の命名による。

## 転職 40歳で朝日新聞へ

漱石に転機が訪れたのは四十歳の時。東京帝国大学に残って教授になるか、それとも辞めて朝日新聞社の専属作家になるか…悩んだ末、家族のための安定収入を条件に朝日新聞社入社を決意します。

漱石の月俸は二百円、最高幹部の主筆・池辺三山の月俸が二百七十円、経済部長・松山哲堂が百四十円ですから破格の待遇です。これに応えるように「入社の辞」では「新聞屋が商売ならば、大学も商売である。(略)新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。」と自らの意気込みを示し、いっぽうで「(大学を)やめた翌日から急に背中が軽くなって、肺臓に未曾有の多量な空気がはいってきた」と、本音をもらしています。

## 食 最期の望みは「何か喰いたい」

朝九〜十時に起き、朝食は火鉢で焼いて砂糖をつけたパンと紅茶。千駄木時代にはジャムを舐めすぎて医者に禁じられたそうです。また、熊本の新婚時代、朝の苦手な鏡子夫人が朝寝坊して朝食抜きで学校へ出かけたことも多々ありました。

夕食は一汁、二、三菜に香の物、メインディッシュは一日置きに魚と肉料理。とくに牛鍋は漱石の大好物でした。甘い菓子類も好きで、ビスケットを食べ過ぎたり、秋田蕗の砂糖漬けを食べて鏡子夫人に叱られたりしています。

死の床についた最期の望みも「何か喰いたい」でした。与えられた一匙のぶどう酒に「うまい」という一言を遺して亡くなりました。

Inside Story

# 名作誕生、その時漱石は…。

誰もが知っている、読んだことのあるあの作品はどのように書かれたのか、
その時漱石はどんな生活を送っていたか。病気、転職、仕事上の悩み…
作品の裏に潜むエピソードをご紹介します。

## 『吾輩は猫である』

**初出：『ホトトギス』明治38年1月～39年8月まで10回にわたり断続的に連載**

あらすじ：英語教師・苦沙弥先生の飼い猫の視点から、飼い主一家やそこに集まる個性的な人々の人間関係を滑稽と風刺を交えて描いた作品。漱石をはじめその家族、門人たちがモデルとして登場する。

**最初は「猫伝」、名づけ親は高浜虚子だった!?**

英国留学中から、強度の神経衰弱に悩まされるようになっていた漱石は、明治三十七年（一九〇四）の春から夏にかけて、徐々に回復の兆しを見せ始めます。その頃、どこからともなく生まれたばかりの子猫が、千駄木の漱石宅にやってきました。猫嫌いだった鏡子夫人は、この子猫を嫌って外につまみ出すのですが、子猫は何度でも家に入りこんできます。

そんな鏡子夫人と子猫のいたちごっこを見かねた漱石が、「おいてやりなさい」と声をかけたところから、この名作が生まれることになるのですが、その年の暮れから、突如創作意欲にかられて次々に作品を発表し始めます。

『吾輩は猫である』は高浜虚子に勧められ、当時正岡子規の旧居で行われていた文章会「山会」で発表するために書き始めたものです。漱石は出来上がった原稿を虚子に読ませ、指摘された数箇所を修正したり削除したりしています。タイトルも「猫伝」とするつもりでしたが、虚子が書き出しの一文を取って、「これでよかろう」と決めたのでした。初めは一回限りの短編の予定だった『吾輩は猫である』は好評を得て連載となり、作家漱石の評価を高める作品となります。

# 『坊っちゃん』

**初出：『ホトトギス』明治39年4月**

あらすじ：正直で生一本の新米教師坊っちゃんが、赴任先の四国松山の中学校で生徒たちのイタズラにあい、陰険な策略に巻き込まれながらも、竹を割ったような性格でぶつかっていく様子を描いた作品。

## 「作家として立ちたい！」と思い始める

愛読者の多い『坊っちゃん』には、単純に個性的な人物が登場するだけでなく、さまざまな人間の性格や思考を登場人物に当てはめ、坊っちゃんという、不器用な個性との対比として、鮮やかに描かれています。

漱石がなぜ愛媛県尋常中学の教員として松山への赴任を選んだかは謎です。失恋のため、神経衰弱を治すため、洋行の費用をつくるためなどさまざまな憶測があります。それはともあれ東京からはるばるやってきた漱石にとって松山は、たった一年とはいえ『坊っちゃん』の材料にぶつかり、また生涯の友であり、漱石に多大な文学的影響を与えた正岡子規と五十二日間にわたり暮らすなど、実際の居住年数をはるかに超えた大きな意味を持つ土地となりました。

『吾輩は猫である』の成功により作家としての自信を得た漱石は、この名作を、ほぼ一週間で書いたといわれます。いかにも楽しそうに、学校から帰って机に向かっていた漱石の姿を鏡子夫人が記憶しています。「作家として立ちたい」という思いを持ち始めた、本格的な文学への道を目指す道標ともなった作品です。

『坊っちゃん』『二百十日』『草枕』が収録された『鶉籠（うずらかご）』

# 『虞美人草』

**初出：朝日新聞　明治40年6月23日～10月29日**

あらすじ：我意と虚栄をつらぬくためには全てを犠牲にして悔いることを知らぬ女性藤尾に、哲学者甲野、道義の人宗近らを配して、ヒロインの自滅の悲劇を絢爛たる文体で書いた。

## 新聞デビュー、首相の招待も断って執筆に没頭

朝日新聞社に入社して書いた第一作で、漱石自身「読者の趣味を果たして何年間繋ぎ得るか、これは甚だ心細い。しかし私も男だ。大胆にやって見る積もりだ」という意気込みで筆をとった作品です。『東京朝日新聞』誌上に連載予告が発表されると、前人気が高く、虞美人草浴衣や虞美人草金指輪が売り出されるほどでした。

『虞美人草』を書き上げるまでの漱石は、終始感情を高揚させ、持病の胃弱も悪化させています。折しも届いた、時の首相西園寺公望からの文士招待会への招待も、「時鳥（ほととぎす）厠半ばに出かねたり」（執筆中のため出席できません）という一句を添えて欠席しています。

さて、そんな漱石が大きな意気込みで書きあげた『虞美人草』。その甲斐あって発表当時、作品は高く評価されますが、漱石はこの作品がどうあっても気に入らなかったようです。「垢抜けない」「技巧が鼻に付く」などといっては、後に持ち込まれた英語版の出版や、舞台化したいという申し出も、すべて断ってしまったのでした。

# 『硝子戸の中』

**初出：朝日新聞　大正4年1月13日～2月23日**

あらすじ：早稲田南町の漱石山房で起こる出来事、記憶の底に沈んでいる体験や回想に光をあて書き留めた随筆集。喜久井町の生家や両親、兄弟のことなどが淡々と、しかしどこか明るく語られている。

## 書斎から見えてきたもの

『こゝろ』を書いた直後（大正三年九月）に四度目の胃潰瘍で病臥し、回復したものの療養状態が続きました。その頃中勘助から送られてきた「つむじまがり」（「銀の↖

月刊『ニコニコ』という雑誌に載った写真
珍しく笑った表情は修正によるものらしい。この写真の撮影にまつわる話が『硝子戸の中』に登場する

# 『こゝろ』

**初出：朝日新聞　大正3年4月20日～8月11日**

あらすじ：かつて親友を裏切って死に追いやり、恋人を得た“先生”。
その不思議な魅力にとりつかれた学生の目から、孤独な明治の知識人の内面を描いた作品。

## 死の淵からの生還、末娘の死

明治四十三年（一九一〇）、胃潰瘍のため一ヶ月半ほどの入院生活を余儀なくされた漱石は、退院後静養するつもりで向かった修善寺温泉で大量吐血の末、危篤状態に陥ります。俗にいう「修善寺の大患」です。

再度の入院生活を経てようやく退院できることとなった四十四年二月、文部省から一方的に授与された文学博士号をめぐって、漱石は「欲しいといった覚えなどない」という理由で二ヶ月にわたり文部省と対立し、世間でも様々に取りざたされました。さらに追い打ちをかけるように、末娘ひな子の急死、病気の再発が漱石を襲います。

大正三年（一九一四）に書かれた『こゝろ』は、大病を通して知った自身の命や、人間の危うさ、また肉親の情や周辺の人間関係など、あらゆる人間の持ち得る矛盾とエゴイズム、そしてエゴイズムゆえの純粋性、また純粋であるがこそ苦しみ続けなければならない現実を描いています。このような大きなテーマを持つこの作品は、晩年の代表作といえます。この二年後、漱石は四十九歳の生涯を閉じます。

↙匙（さじ）」後編、後に漱石の尽力により朝日新聞に掲載される）の原稿に目を通す勇気もないと手紙に書いています。

暮れからは風邪も引き、書斎に引きこもっていた漱石は『硝子戸の中』を、一月四日から二月十四日まで、ほぼ一日に一回分のペースで書き続けました。

題材は飼い犬の話や訪ねてきた自殺願望の女性といった身の回りで起こったことや幼い頃の回想です。特に中盤から後半にかけての幼少期から青年期の「記憶」は、推薦文を書くために読んだ木下杢太郎（きのしたもくたろう）の「唐草表紙」に影響されたもので、「あなたは自分の幼児の追憶を、今から回顧して忘れられない美しい夢のように叙述しています」と述べています。そのせいか、幼い自分を厄介者扱いした父親への視線もどこか優しく、思い出は「夢幻（ゆめうつつ）のように」透明感を持って語られます。小品ながら自らの原点に立ち戻り、さらに『道草』『明暗』と続く最晩年の創作活動につながるテーマを手に入れた作品といえます。

Inside Story

# その他の漱石作品

## 『草枕』

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」の書き出しで有名。俗界を離れ美の幻想に生きようとする青年画家が、結局芸術は人間社会の道徳や倫理と切り離しては考えられないと悟る過程を描いています。

## 『夢十夜』

「こんな夢を見た」で始まるこの作品は、第一夜から十夜まで独立した、それぞれにロマンチックで幻想的な短編が綴られています。漱石自身はこれ以降、このような幻想小説的な作品は書きませんでしたが、この作品の傾向は、門下生の内田百閒に受け継がれていくのです。

## 『三四郎』

『それから』『門』へと続く、三部作の第一作。熊本から大学入学のために上京した三四郎が、さまざまな出会いを通して多くの体験を重ねていく、いわば漱石流「青春小説」です。一人の無垢な青年を通じて、西欧化する当時の日本を批判して注目を集めました。東京大学の「三四郎池」はこの作品に由来します。

## 『それから』

主人公代助は三十歳になっても定職に就かず、仕送りで裕福な生活を送る人物です。この彼が、かつて自ら友人に引き合わせた三千代との愛を貫こうと、今は人妻となっている三千代とともに生きる決意をする。社会的正義と精神的真実を対立させ、人間の理性や知性を内面から描き出した作品です。

## 『門』

妻と二人で崖下の家にひっそりと暮らす薄給の官吏宗助が主人公。子宝に恵まれず、ある日見てもらった易者に「過去の罪」を指摘され、驚愕します。宗助の妻はかつて親友の妻だったからです。罪とは過去の事実にあるのではなく、人間の心の中に常に内在している、と漱石は語っています。

## 『道草』

漱石の唯一の自伝的小説。英国から帰国してから、『吾輩は猫である』執筆前後の漱石自身の実体験を、大学教師の健三に置き換えて描いています。「自分のもっとも卑しいところ、面目を失するようなところ」を隠さずあらわした、という漱石自身の証言があります。

## 『明暗』

主人公津田とその妻お延を軸に、人間のエゴイズムの問題に容赦なくメスを入れた作品。漱石が最晩年に到達した思想「則天去私」を描こうとした作品ともいわれますが、漱石の死によって未完に終わっています。

# 作品年譜

| 年 | 作品名と初出 | 単行本 |
|---|---|---|
| 明治38年 | 1月『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に連載<br>『倫敦塔』(『帝国文学』)『カーライル博物館』(『学燈』)<br>『琴のそら音』(『七人』) | 大倉書店・服部書店<br>「上編」明治38年　「中編」39年<br>「下編」40年 |
| 明治39年 | 4月『坊っちゃん』(『ホトトギス』)『草枕』(『新小説』)『二百十日』(『中央公論』) | 春陽堂『鶉籠』所収／明治40年 |
| 明治40年 | 1月『野分』(『ホトトギス』)<br>6月～10月『虞美人草』を『朝日新聞』に連載。<br>※以降の作品はすべて『朝日新聞』に連載。 | 春陽堂『草合』所収／明治41年<br>春陽堂／明治41年 |
| 明治41年 | 『坑夫』(1月～4月)『文鳥』(6月)『夢十夜』(7・8月)『三四郎』(9月～12月) | 春陽堂／明治41・43年 |
| 明治42年 | 『永日小品』(1月～3月)<br>『それから』(6月～10月) | 春陽堂／明治43年 |
| 明治43年 | 『門』(3月～6月) | 春陽堂／明治44年 |
| 明治45年 | 『彼岸過迄』(1月～4月) | 春陽堂／大正元年 |
| 大正元年 | 『行人』(12月～2年4月・9月～11月) | 大倉書店／大正3年 |
| 大正3年 | 『こゝろ』(4月～8月) | 岩波書店／大正3年 |
| 大正4年 | 『硝子戸の中』(1月～2月)<br>『道草』(6月～9月) | 岩波書店／大正4年<br>岩波書店／大正4年 |
| 大正5年 | 『明暗』(5月～12月)、漱石の死によって未完。 | 岩波書店／大正6年 |

南と東側には硝子の西洋窓
（漱石の随筆『硝子戸の中』に登場する窓）

古ぼけた格子戸の外は壁と云わず壁板と云わず、悉く蔦に蔽はれていた玄関
（訪問者は蔦の枯葉をがさつかせて呼び鈴を鳴らす）

## 写真で見る漱石の書斎

# 漱石山房の記憶

漱石が明治40年（1907）9月から、大正5年（1916）12月に亡くなるまで過ごしたのが、早稲田南町7番地の「漱石山房」です。最晩年の弟子であった芥川龍之介は、数々の名作を世に送り出したこの漱石の書斎の様子を「漱石山房の秋」「漱石山房の冬」と題して克明に書き残しています。その中には「二枚重ねた座蒲団の上には、何処か獅子を想はせる、脊の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を飜したりしながら、端然と独り座つている。…」と、当時の漱石の迫力ある姿も描かれています。この芥川の描写をもとに山房の様子を写真でご紹介します。

※写真の説明は芥川龍之介作の「漱石山房の秋」を基に構成しました。

赤い絨毯
（多数の本が置かれ赤い色は僅かしか見えない）
無闇に大きな書棚
（和漢洋の書物が詰まっている）
収まらない書物が床に置かれている
まん中に小さい紫檀の机
（この机で執筆）
二枚重ねの座蒲団
傍らの瀬戸火鉢
（鉄瓶がたぎっている）

瓦斯暖炉
（夜寒が甚だしいとき使った）

書斎の隣りの客間（木曜会も行われた。正面奥の仏間は漱石没後につくられたもの）
唐紙の左右壁際に余り上等でない硝子戸の本箱（洋書が詰まっている）

# 山房時代の漱石

## 早稲田南町七番地の家

明治三十九年（一九〇六）の暮れも押し詰まったころ、かつて森鷗外が暮らし、『吾輩は猫である』を書き上げた千駄木の通称「猫の家」を引き払わねばならない事情ができました。家の持主であり学友の斎藤阿具が帰京することになったからです。

鏡子夫人は、大あわてで本郷西片町にともかくも急場しのぎの借家を見つけ、そこに引き移ることになりました。新居の家賃は二十七円でした。教職を辞して朝日新聞社に入社した漱石にとって、この新しい家はどうやら相性のいいものとは言い難かったようです。ようやく記念すべき第一作『虞美人草』を書き上げてみれば、家主が立て続けに三十円、さらに三十五円と家賃の値上げを要求してくる有り様で、「学校に行く必要がないのだから、本郷でなくてもかまわない」と四十年九月、鈴木三重吉や小宮豊隆と連れだって散歩がてらに見つけてきたのが、早稲田南町七番地の家でした。

面積は三百四十坪、中央に六十坪の平屋建て。庭は広く大きな木があり、東側のベランダ式回廊がめぐる和洋折衷構造の部分が書斎にうってつけでした。家賃も四十円を、漱石の名刺を出して三十五円に値引きしてもらっています。

奇しくも漱石の生まれた喜久井町の家とは目と鼻の先の場所にあり、「漱石山房」と呼ばれたこの家で亡くなるまで九年間を過ごします。

**机まわり**
絶筆の遺作『明暗』まで多くの代表作がこの机で執筆された。漱石の好んだ紫檀の机の上には、竹腕枕、象牙ペーパーナイフ、原稿用紙、オノト万年筆、眼鏡ケース、銅印2顆

書斎を囲むベランダ式回廊に座る漱石（大正4年）

**漱石山房の外観**
芭蕉の木が植えられ、木賊が庭を埋め尽くす

## 毎日机に向かい一回分を書く

この家で漱石はどんな執筆生活をしていたのでしょう。入居時はちょうど朝日新聞社に入社したばかりで、作家業に専念し始めた時期でした。朝は九時か十時に起き、朝食が終わると昼食まで机に向かって執筆を続け、書き上がると午後は漢詩を作ったり、自宅で謡(うたい)の稽古をしたり、矢来町の古道具屋をのぞいたり、子供を連れて江戸川に花見に行ったり…と気分転換を図っていた様子がうかがえます。

しかし執筆がはかどっていたのは、『坑夫(こうふ)』や『三四郎』(明治四十一年／一九〇八)など初期の頃までで、一日の執筆量は原稿用紙十七枚から二十枚、『彼岸過迄(ひがんすぎまで)』(四十五年)あたりになると、一日に新聞連載一回分、だいたい原稿用紙八枚にペースダウンしています。これは修善寺の大患以降の健康悪化によるものです。

しかし、大正二年(一九一三)に胃潰瘍(いかいよう)により『行人(こうじん)』を途中休載した以外は、一回たりとも連載を休むことはありませんでした。漱石の執筆の様子を知る貴重な手がかりに、三年の『大阪朝日』に載った談話があります。

「執筆する時間は別にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回づゝ書く。書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張(やはり)一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来そうに思ふ。一気呵成(かせい)と云ふやうな書方はしない。一回書くのに大抵三、四時間もかゝる。然し時に依ると、朝から夜までかゝつて、それでも一回の出来上らぬ事もある」

苦しみながらも几帳面(きちょうめん)に原稿を渡していた漱石の誠実な姿が浮かびあがってきます。

書斎に座る漱石(大正3年)

### 「漱石文庫」

漱石山房にあった蔵書類は、漱石の門下生で東北帝国大学附属図書館長(当時)であった小宮豊隆の尽力により、昭和18年から19年にかけて同図書館に搬入されました。

漱石山房は昭和20年の空襲で焼けてしまいましたが、このために焼失を免れ、「漱石文庫」として今も大切に所蔵され、その後の漱石研究に貢献しています。

小宮豊隆

夫婦

## 東京帝国大学時代

長女筆子と結婚

- 野村傳四*
- 小山内薫
- 鈴木三重吉*
- 小宮豊隆*
- 野上豊一郎*・弥生子
- 生田長江*
- 安倍能成*
- 阿部次郎*
- 内田百閒*
- 中　勘助*
- 松岡　讓*

## 松山時代

同僚→
- 弘中又一…「坊っちゃん」のモデル
- 渡部政和…「山嵐」のモデル

教え子→
- 眞鍋嘉一郎…後に漱石の主治医となる
- 松根東洋城*

友人→
- 村上霽月…俳人

## 朝日新聞社

- 石川啄木
- 池辺三山
- 森田草平*

文芸欄の編集を担当

主筆、漱石の朝日新聞入社を勧める

## 熊本時代

教え子→
- 寺田寅彦*
- 橋口　貢
- 坂元雪鳥

弟→
- 橋口五葉
- 津田青楓

漱石作品の装丁・挿し絵を手がける

# 漱石早わかり交友相関図

*のついている人物は木曜会に集まった人々です。詳しくはP20-24を参照

## 学生時代
（東京大学予備門・東京帝国大学）

同窓→

芳賀矢一…国語国文学者
山田美妙…小説家
菊池謙二郎…教育者・歴史家
中村是公…後の満鉄総裁
太田達人…教育者
米山保三郎…哲学者

正岡子規

同窓

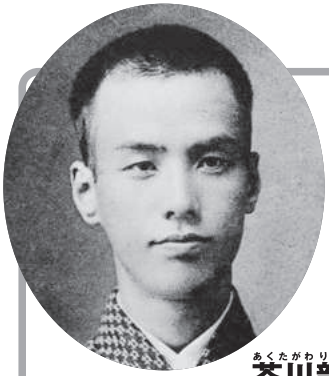
## 正岡子規門下

坂本四方太…俳人
水落露石…俳人
柳原極堂…俳人

『ホトトギス』の経営を引き継ぐ

高浜虚子*

## 文学界



芥川龍之介*

森　鷗外　　有島武郎
菊池　寛*　　岩波茂雄*
久米正雄*

**白樺派**
武者小路実篤　長與善郎
志賀直哉

# 漱石と木曜会

## 若い弟子たちが集まった「木曜会」

小説家としての地位が確固たるものとして築かれていくにつれ、夏目家を引きも切らずに多くの訪問者たちが訪れるようになりました。「おちおち仕事もできない」状態に頭を悩ませた漱石に、鈴木三重吉が提案して、毎週木曜日を面会日と決めました（午後3時以降）。

第1回は明治39年（1906）10月11日に催されました。後に「木曜会」と呼ばれるこの会は、会に集まる人の原稿を高浜虚子や漱石が読みあげ、聞き手はけちを付けるというものでしたが、それがやがて漱石を慕って集まる文学サロンへと育っていきました。かねてから「僕の理想を言えば、学校へは出ないで毎週一回出入りする学生諸君を呼んで、ご馳走をして冗談を言って遊びたい」という、漱石自身の夢に近づいたものとなります。

後年、鈴木三重吉らは漱石山房時代を思い起こし、「僕たちは幸福だったね。夏目漱石と同じ時代に生まれたのさえ幸福だのに、しかも親しく教えを受けたのみか、お互いさんざんぱらわがままを言ったり、叱られたり、甘えたり、厄介をかけたりしたのは、（中略）何という果報者だろう」と語り合ったといいます。

### 正岡子規　まさおか しき　慶応3～明治35年（1867～1902）

俳人・歌人。漱石と子規の出会いは東京大学予備門（一高）時代ですが、本格的に知り合うのは明治22年（1889）5月、漱石が子規の文集に批評文を寄せたことからです。悠然と詩文を作って興じる子規から漱石は強い影響を受けたといいます。同じ頃、子規は肺結核と診断され、以後、死と隣接しながらも35年の子規の死まで、お互いの友情は続いていきます。

28年には、子規の故郷であり当時漱石が赴任していた松山の一軒家で、1階に子規、2階に漱石が52日を暮らした時期もありました。漱石は子規の影響で句作に励み、子規は俳人漱石の句法、奇想天外の新しさ、滑稽思想を高く買っていたようです。

二人の関係を「同じ歳だが、万事が弟扱いだった」と漱石はぼやきます。また寺田寅彦は、「いったい、子規という男はなんでも自分のほうがえらいと思っている、生意気なやつだよ」と言って笑う漱石を回想し、互いに許し合い、なつかしがっている心情が伝わってきたと語っています。

### 高浜虚子　たかはまきょし
明治7～昭和34年（1874～1959）

津田青楓画「漱石山房と其弟子達」

俳人・小説家。旧制伊予尋常中学の頃、松山に帰省していた正岡子規と漱石に初めて会っています。子規に兄事した虚子は、明治三十年(一八九七)に松山で創刊された俳句雑誌『ホトトギス』を、翌年東京に移転し経営を引き継いでいます。

子規の没後も漱石との親交は続き、英国から帰国して強迫的な神経衰弱に悩まされていた漱石を気遣い、度々訪問して話をしたり、能見物に誘ったり、小説を書くことを勧めたのも虚子でした。『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』などの作品が次々と『ホトトギス』に発表され、広く世に知られることとなります。

木曜会でも中心的な存在で、文学的にも私生活上でも深い係わりを持っていた虚子はいわば「小説家夏目漱石」の誕生を、側面から支えるとともに、漱石の中から子規的世界を引き出し、継承させた存在ともいえるでしょう。

## 寺田寅彦 てらだ とらひこ

明治11～昭和10年（1878～1935）

物理学者・随筆家。熊本の第五高等学校時代の教え子で、漱石の新婚家庭を訪ねて俳句の手ほどきを受けています。

上京して明治三十二年（一八九九）、東京帝国大学物理学科に入学。漱石は教え子という関係以上に寅彦に親しみを感じていたことが、五十二通にもおよぶ書簡が残されていることからも伺われます。寅彦のほうも「色々な不幸の為に心が重くなつたときに、先生に会つて話をして居ると心の重荷がいつの間にか軽くなつていた。（中略）先生といふものの存在そのものが心の糧となり医薬となるのであつた。」と漱石の存在をかけがえのないものと捉えていました。

『吾輩は猫である』の寒月のモデルとしても知られ、漱石は寅彦が前歯を折ったことを寒月が椎茸を食べて前歯を欠いた話にして寅彦に嫌がられています。また漱石は『虞美人草』を書いていた頃に、ニコルスの「光圧の測定」に関する実験の話を聞いただけで理解し、野々宮さんの実験室の光景を書いたことから、「日本の文学者には珍しく、科学の素養があった」と寅彦に言わしめました。

## 森田草平 もりた そうへい

明治14～昭和24年（1881～1949）

小説家。漱石と森田草平の出会いは、草平が明治三十八年（一九〇五）文芸雑誌『芸苑』に発表した処女作『病葉』の感想を漱石に求め、漱石がそれに応じたことがきっかけでした。漱石は「文章に懲りすぎて失敗しそうな懸念」を伝えながらも、「悪口を言っても、怒ってはいけません。大学では君の先生かもしれないが、文章を書くことにおいては同輩です。けっして自分に気を使わないように」という意味の、心温まる手紙を草平に送り、感激した草平は漱石への尊敬を深めていきます。

四十一年三月、すでに妻子のあった草平は遺書を残し、閨秀文学会で文学指導にあたっていた平塚明子（雷鳥）と、塩原で心中未遂事件を起こします。二人は失踪から二日後、地元警察署員らに無事発見されますが、漱石は草平を自宅に迎え、醜聞の渦中にあった彼を守りました。

この体験を基に書いた小説『煤煙』は、漱石が新人作家の発表の場として創設した朝日新聞の「文芸欄」の第一回に掲載されることになります。

## 小宮豊隆 こみや とよたか

明治17～昭和41年（1884～1966）

評論家・独文学者・漱石研究家。小宮豊隆は『三四郎』の主人公のモデルであるとも言われている人物です。第一高等学校を経て、明治三十八年（一九〇五）東京帝国大学独文科入学時に、従兄の紹介で漱石の家を訪ね、保証人を頼んで以来親交を結びます。卒業後は漱石の紹介で慶應義塾大学の講師に招かれ、朝日新聞に

「文芸欄」が開設されると、森田草平と共にスタッフに加わりました。

引っ込み思案で内気な性格の豊隆宛の手紙に、漱石は、「僕を頼ってはいけない、(原稿も)すべて目を通してもらってからということでは独立心がない」と諭し、文壇に立つものの心得を説いています。漱石没後、豊隆は『漱石全集』の完成に専念、昭和十三年(一九三八)に刊行された『夏目漱石』は漱石研究・解釈に多大な影響を及ぼしました。また、東北大学附属図書館長として、漱石文庫の受け入れに尽力したことでも知られています。

## 内田百閒

うちだ ひゃっけん

明治22～昭和46年(1889～1971)

小説家・随筆家。岡山中学四年の時に『吾輩は猫である』を読み、熱烈な漱石崇拝者になります。六高時代には『老猫』という作品を漱石に送り、「筆ツキ真面目にて何の衒ふ処なくよろしく候。又自然の風物の叙し方も面白く思はれ候。」という愛情あふれる返事をもらっています。

明治四十三年(一九一〇)上京して東京帝国大学に入学、長与胃腸病院に入院していた漱石を見舞ったのが始まりで、以後木曜会の常連小宮豊隆、森田草平らとも親しく交友関係を結びます。しかし、著作への崇敬から発する百閒の漱石に接する際の緊張感は、他の門下生と一線を画するものでした。

死後ただちに始められた『漱石全集』出版のための原稿・原本整理や校正を手伝い、漱石の著作の一字一句を追いながら校正を続ける傍ら、百閒は自分の作品の想を練り小説執筆への意志を、その日記帖に書き記しています。この日記も漱石の影響で付け始めたものでした。

## 芥川龍之介

あくたがわ りゅうのすけ

明治25～昭和2年(1892～1927)

小説家。大正四年(一九一五)十二月、漱石の死の前年、東京帝国大学英文科の同級だった久米正雄と一緒に、漱石を初めて訪ねています。後年、芥川は漱石に会った第一印象を、「なんだか(催眠術でもかけられそうな)、この人がもし悪いといったら、どんな傑作でも悪いと信じ込みそうな気がする、一種の(人格的なマグネティズム)とでも言うべきものが、たえず身辺から放射されているようであった」と、その影響力について述べています。

そんな漱石が芥川の『鼻』を読んで絶賛したのですから、芥川は天にも昇る思いです。しかしその後、芥川と久米に宛てた手紙で「君たちは新時代の作家になるつもりでしょう。僕もそのつもりであなた方の将来を見ています。どうぞ偉くなってください。ただし、むやみにあせってはいけません。ただ牛のように、図々しく進んでいくのが大事です」と、その文学的野心を愛でつつも、若者に対して牛のような鈍重なしぶとさを求めることも忘れませんでした。

## 津田青楓　つだ せいふう　明治13～昭和53年（1880～1978）

画家。明治44年（1911）に小宮豊隆を介して漱石と知り合い、漱石山房を訪れるようになります。漱石の紹介で朝日新聞の挿し絵を描くようになり、後には『道草』など本の装丁も任されました。漱石を通じて良寛を知り、晩年は良寛風の書や和歌を好んで書きました。

## 鈴木三重吉　すずき みえきち　明治15～昭和11年（1882～1936）

小説家・童話作家、雑誌『赤い鳥』の創刊者。漱石の門下生となったのは、森田草平とほぼ同じ明治39年（1906）、東京帝国大学文学部英文学科に在籍していた時です。療養先の広島県能美島を題材にした処女作『千鳥』を読んだ漱石は「どうか面白いものをもつと沢山かいて屁鋒文士を驚かして呉れ玉へ」と励ましの言葉を送っています。

## 阿部次郎　あべ じろう　明治16～昭和34年（1883～1959）

評論家・美学者・哲学者。森田草平・小宮豊隆らと文通していた阿部は、明治42年（1909）11月に初めて漱石の家を訪ねています。東京帝国大学卒業後、漱石の作品批評によって評価を得、自己省察の記録『三太郎の日記』の著作でも知られています。

## 安倍能成　あべ よししげ　明治16～昭和41年（1883～1966）

評論家・哲学者。『思想と文化』『西洋近世哲学史』などの著書で知られています。明治40年（1907）11月から、漱石の家を訪れるようになり、42年11月、漱石が主宰してスタートした朝日の「文芸欄」に安倍の『空疎なる主観』が掲載されています。後に一高校長、文部大臣。

## 松根東洋城　まつね とうようじょう　明治11～昭和39年（1878～1964）

俳人。『漱石俳句研究』などで知られます。松山中学在学中、英語教師として来た漱石に師事。第一高等学校時代も熊本の漱石に俳句の指導を受け、子規庵にも出入りしています。後に「写生」一筋の子規に飽きたらなくなった松根は芭蕉へと心が傾き、俳句雑誌『渋柿』を創刊しています。

## 和辻哲郎　わつじ てつろう　明治22～昭和35年（1889～1960）

哲学者・文化史家。東京帝国大学在学中、谷崎潤一郎と第二次『新思潮』を創刊。第一高等学校時代には、教室の窓の外から漱石の授業を聴くほどの熱狂ぶりで、帝国大学卒業後は漱石山房を訪れるようになります。『古寺巡礼』などの著作で知られます。

## 松岡 譲　まつおか ゆずる　明治24～昭和44年（1891～1969）

小説家。東京帝国大学在学中に漱石の門人となり、卒業後漱石の長女筆子と結婚。自伝小説『法城を護る人々』はベストセラーになったほか、鏡子夫人の思い出をまとめた『漱石の思ひ出』は家庭における漱石の生活記録として広く読まれています。

## 久米正雄　くめ まさお　明治24～昭和27年（1891～1952）

小説家・劇作家。大正4年（1915）、林原耕三の紹介で芥川龍之介とともに門下生となります。翌年、小説『父の死』、戯曲『阿武隈心中』などを発表し、新進作家として注目されます。漱石の死後、長女筆子への失恋体験を『螢草』『破船』などの作品に書いたことでも知られています。

# 歩いて体験 漱石散歩ガイド
# 漱石の散歩道

漱石の誕生の地から、
父親の名づけた夏目坂を上って、
代表作の数々を生み出し、
49歳の生涯を閉じた「漱石山房」の跡へ。
さらに足をのばして、
日常の買い物や弟子たちとの食事、
ときには寄席にも出かけた神楽坂へ。
『硝子戸の中』『それから』には
早稲田・神楽坂界隈が数多く登場します。
漱石を身近に感じながら、
歩いてみてはいかがですか。

# 漱石の散歩道 マップ編

## 8 和良店亭（わらだなてい）

（当時：牛込区肴町）

藁店（地蔵坂の別名）にあった色物講談を得意とする寄席で、落語好きの漱石が足繁く通った。神楽坂は当時5つの寄席が並び、東京の芸能の中心だった。

## 9 田原屋（たわらや）

新宿区神楽坂5-35
（毘沙門天の西）

菊池寛や佐藤春夫、永井荷風らも通った牛鍋屋。のちに果実屋となり、大正時代初めに洋食屋になったが、平成14年（2002）に閉店。

## 10 善国寺（ぜんこくじ）（毘沙門天（びしゃもんてん））

新宿区神楽坂5-36

「毘沙門さま」の愛称で親しまれ、縁日の賑わいは『坊っちゃん』の中にも出てくる。

朱塗りの建物が目にあざやかな境内

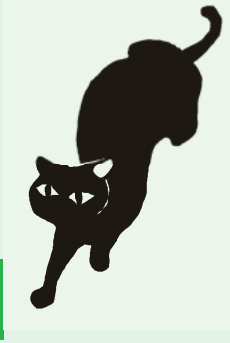
散策メモ▶毎月5のつく日に開かれていた縁日は現在、7月末のほおづき市のみ開かれている。

## 11 相馬屋（そうまや）

新宿区神楽坂5-5

地蔵坂の入り口付近にある文具店。漱石はここの原稿用紙を愛用した。

神楽坂に面した店構え（現在はビルの1階）



## 12 東京物理学校（現東京理科大学）

新宿区神楽坂1-3

『坊っちゃん』は東京物理学校出という設定。明治39年に建築された校舎が復元され、現在近代科学資料館として公開されている。

復元された資料館建物

散策メモ▶館内では「計算機の歴史」を中心とした興味深い展示を見学することができる。（入館無料）
※開館日・時間については、資料館へ直接お問い合わせ下さい。03-5228-8224

トイレ
休憩場所
撮影ポイント

## 1 誕生の地 新宿区指定史跡

新宿区喜久井町1
（当時：牛込馬場下横町）

生誕100年を記念して建てられた石碑（弟子の安倍能成の筆による）。

黒御影石の石碑



## 2 夏目坂

新宿区喜久井町
（誕生の地の前）

馬場下から南東へ上る坂。漱石の父・直克が命名。

標柱を入れて撮る（車の少ない瞬間がシャッターチャンス）



## 3 小倉屋（誕生の地隣り）

新宿区馬場下町3

後に赤穂浪士となる中山安兵衛がここの升酒を引っかけて助太刀に向かったという酒屋さん。裏手に漱石の生家があった。

かつて漱石の生家もあった小倉屋のある一画

散策メモ▶写真を撮ったり訪ねるときは一言声をかけよう。



## 4 誓閑寺

新宿区喜久井町61

『硝子戸の中』で「西閑寺」、『二百十日』で「寒磬寺」として登場するお寺。

区内最古の梵鐘

散策メモ▶ただし、現存している鐘は小説内で書かれている「鉦」とは別のもの。

## 5 終焉の地（漱石山房） 新宿区指定史跡

新宿区早稲田南町7「新宿区立漱石公園」
（当時：牛込区早稲田南町7番地）

明治40年（1907）9月から大正5年（1916）に亡くなるまでを過ごした家があった場所。富永直樹作の漱石の胸像と「猫塚」がある。

胸像と猫塚

## 6 帰国後住んだ家

新宿区矢来町3
（当時：牛込区矢来町三中の丸）

明治36年（1903）1月英国より帰国後、妻鏡子の実家中根家のはなれに住んだ。留守宅の困窮ぶりはひどく、漱石を驚かせたという。

## 7 神楽坂

神楽坂1～6丁目

甲武鉄道牛込停車場の開設で発展、山の手随一の繁華街として賑わった。多くの作品に登場し、お見合いした漱石と鏡子夫人がすれ違ったのも神楽坂だった。

神楽坂の情緒あふれる路地

# 漱石の散歩道 解説編

出発点は喜久井町から

## 誕生の地 新宿区指定史跡

漱石の生家は当時「馬場下横町」といったが、江戸時代には町方名主をつとめ、明治維新後は区長となった父直克が夏目家の家紋「井桁に菊」にちなんで「喜久井町」とした。

『硝子戸の中』に、生家を見に行ったら下宿屋の看板が出ていたとの記述があるが、直克が亡くなると三番目の兄直矩が生家を売却したので、執筆当時は夏目家の所有を離れて二十年近くが経っていたことになる。

Map1

父直克が名づけた坂

## 夏目坂

漱石は次のように書いているが、漱石ゆかりの坂名としてこんなに有名になるとは思わなかったであろう。

「父はまだその上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなければならな

漱石が9年間暮らした家

## 終焉の地（漱石山房） 新宿区指定史跡

明治四十年（一九〇七）朝日新聞社に入社し、作家人生をスタートさせた年から、大正五年（一九一六）に亡くなるまで過ごした早稲田南町の家。この家は「漱石山房」と呼ばれ、漱石はここで『三四郎』『それから』『こゝろ』といった代表作を執筆した。また「木曜会」には、多くの門人が集った。昭和二十年（一九四五）の空襲で全焼し、現在はその地の一部が「新宿区立漱石公園」となっている。

Map9

三代目小さんの至芸に酔いしれる

## 和良店亭

明治時代神楽坂にあった「牛込亭」「神楽坂演芸場」などの寄席の一つで、漱石が足繁く訪れ、三代目小さんの蕾がふくらんでいるのを眺めている。

また、『坊っちゃん』にはこんな縁日の思い出も描写されている。

「それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云ったら、赤シャツは顎を前の方に突き出してホホホホと笑った。」

Map10

文豪たち御用達の原稿用紙

## 相馬屋

万治二年（一六五九）の創業当初は和紙を漉いて江戸城に納めていた。後に問屋となり、明治中期に和半紙だった原稿用紙を尾崎紅葉の助言で洋紙にして売り出す。北原白秋、石川啄木、坪内逍遙たちが愛用し、なかでも漱石は色も升目もオリジナルの原稿用紙を作らせたという。「漱石山房」の名が入った原稿用紙は、朝日新聞の連載小説に合わせた十九字×十行

い長い坂に、自分の姓の夏目という名を付けた。不幸にしてこれは喜久井町程有名にならずに、只の坂として残っている。然しこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあったと云って話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。」（『硝子戸の中』）Map2

堀部安兵衛ゆかりの酒屋

## 小倉屋

延宝年間（一六七三～八一）酒店を開業。漱石の生家はこの店舗の裏にあった。一〇〇年以上は経っていた旧店舗は、昭和十年（一九三五）早稲田通りの拡幅により取り壊されたが、現在も営業を続けている。中山安兵衛（後の赤穂浪士堀部安兵衛）が、高田馬場の決闘に駆けつける際、この店で升酒を飲んだという酒升も現存。Map3

至芸に酔いしれた。「藁店」と呼ばれた通り（地蔵坂）にあったことからこの名がある。のちに「牛込館」という洋画系の映画館になった。「落語はすきで、よく肴町の和良店へ聞きに出かけたもんだ。」（談話『僕の昔』）Map8

洋食好きの漱石のお気に入り

## 田原屋※平成十四年閉店

一階は高級フルーツ店、二階はレストラン。漱石をはじめ菊地寛、佐藤春夫、永井荷風などの文豪たちが通った。息子の伸六が風邪をひくと、田原屋からポタージュ・スープとメンチボールを取り寄せたという。Map9

胃が痛くなって
毘沙門さまでひと休み

## 善国寺（毘沙門天）

三度の火災に遭い、寛政五年（一七九三）に現在地に移転。明治四十二年（一九〇九）四月四日に、漱石は寺町に下駄を買いに行き、途中胃痛で毘沙門天境内に腰掛けて休みながら柳が芽吹き風にゆれる様子や、門の傍の桜のもの。竜頭をあしらったデザインは橋口五葉による。なおこれとは別だが、現在も「相馬屋製」の原稿用紙を手に入れることができる。Map11

十一代目による説明も。

坊っちゃんは物理学校出

## 東京物理学校（現東京理科大学）

明治十四年（一八八一）、東京理科大学の前身「東京物理学講習所」が創設され、二年後には東京物理学校と改称。三代目校長中村恭平は漱石と懇意で『吾輩は猫である』のモデルともいわれ、『坊っちゃん』が物理学校出であるのもその関係と思われる。明治三十九年に建てられた木造二階建ての校舎を、若い頃建築家志望だった漱石も興味をもって見ていたに違いない。「どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物理学校の前を通り掛ったら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思って規則書をもらってすぐ入学手続きをしてしまった。」（『坊っちゃん』）Map12

# 漱石三択クイズ

あなたの”漱石力“はどれくらい？
楽しみながらクイズにチャレンジ！

## Q01

夏目漱石の本名は？

□「夏目漱石」
□「塩原金之助」
□「夏目金之助」

## Q02

第一高等中学校時代（二十一、二歳）になりたかった職業は？

□「建築家」
□「画家」

## Q05

鏡子夫人の写真はどれ？

❶

□

❷

□

❸

□

## Q08

門人たちが週に一度だけ漱石に面会できた会合の名前は？

□「山会」
□「九日会」
□「木曜会」

漱石山房に
集まった門人たち
前列右より安倍能成、
小宮豊隆、後列右より
阿部次郎、森田草平

□「落語家」

## Q03

坊っちゃんの出身は？（現在の学校名で）

□「東京大学」
□「東京理科大学」
□「早稲田大学」

## Q04

松山中学校での漱石のあだ名

□「シッポク」
□「鬼がわら」
□「坊っちゃん」

松山中学赴任時代の漱石

## Q06

英国からの帰国後、東京帝国大学の講師になった漱石の前任者は？

□「森鷗外」
□「二葉亭四迷」
□「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）」

## Q07

『硝子戸の中』に描かれている漱石が飼っていた犬の名前は？

□「アキレス」
□「ジョン」
□「ヘクトー」

## Q09

漱石が執筆だけでなく自ら装丁まで手掛けた作品は？

□『こゝろ』
□『それから』
□『明暗』

## Q10

漱石が亡くなる最期に口にしたものは？

□「ビスケット」
□「ぶどう酒」
□「アイスクリーム」

# 正解

answer 01 「夏目金之助」

庚申（かのえさる）の日の申の刻に生まれた漱石は、一つ間違えると大泥棒になる、ただし名前に金の字か金偏の字を選んで名づければ難を逃れるという迷信から、「金之助」と名づけられた。
「漱石」は号、「塩原」は養子先の姓（明治21年に「夏目」姓に戻る）。

answer 02 「建築家」

自分は変人だから変人でも日常欠かせない仕事をすれば自然と人が仕事を頼みにくると考えたという。また、美術が好きなので建築を美術的にしてみたいというのも理由であった。しかし、同級の米山保三郎（写真右）に諭されて「文学」をやることに（「落第」より）。

answer 03 「東京理科大学」

当時は東京物理学校といった。三代目校長中村恭平は漱石と懇意で『吾輩は猫である』の苦沙弥先生のモデルともいわれ、『坊っちゃん』が物理学校出であるのもその関係と思われる。

answer 04 「鬼がわら」

当時生徒の間で歌われた「一つ弘中シッポクさん」で始まる数え歌では「七つ夏目の鬼がわら」と歌われたという。弘中は『坊っちゃん』の主人公のモデルとされた弘中又一で、シッポクは具入りのうどんのこと。
漱石の「鬼がわら」は風貌から出たものとされる。

answer 05 ❸

❶は「樋口一葉」。一葉の父親は警視庁で、漱石の父直克の部下だった時期がある。❷は「平塚雷鳥」。雷鳥は漱石の高弟・森田草平と塩原で心中未遂事件を起こし、連れ戻された森田を漱石が家に引き取ったいきさつがある。

answer 06 「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）」

「小泉八雲」を慕う学生たちによって留任運動にまで発展し、図らずも後任となった漱石は神経衰弱が進み、妻子と別居。新学期からスタートしたシェイクスピアの講義はいつも満員になったが、神経衰弱は悪化の一途をたどった。

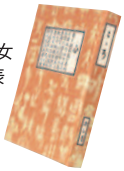
answer 07 「ヘクトー」

漱石の謡いの師であった宝生（ほうしょう）新にもらった犬で、トロイ戦争でアキレスと闘って倒れた勇将の名前にちなんで漱石が名づけた。

answer 08 「木曜会」

『吾輩は猫である』で世に知られると、引きも切らず人が訪ねてきて執筆に支障が出てきたため、毎週木曜日午後3時以降を面会日と決めた。
「山会」は子規を中心に虚子、碧梧桐（へきごとう）らが開いてきた集まり。「九日会」は漱石の死後、門人たちが毎月命日に集まったもの。

answer 09 「こゝろ」



大正3年9月、岩波書店の処女出版として刊行。序文から表紙、題字、見返し、扉、奥付、朱印、検印、箱まですべてを漱石が執筆考案した。

answer 10 「ぶどう酒」

医者のはからいで与えられた一匙のぶどう酒を口に含んで「うまい」と言って亡くなった。
「ビスケット」はロンドン留学時代、昼食代わりに食べていた大好物。「アイスクリーム」も好きで、義弟鈴木禎次（ていじ）から家庭用アイスクリーム器をもらい、子供の多い夏目家では大いに利用されたという。

**主要参考文献**

『漱石の思い出』(文藝春秋)　夏目鏡子・松岡譲
『夏目漱石の手紙』(大修館書店)　中島国彦・長島裕子
『夏目漱石と経済』(近代文芸社)　鈴木英雄
『講座　夏目漱石　第四巻　漱石の時代と社会』(有斐閣)　三好行雄・江藤淳ほか
『孫娘から見た漱石』(新潮社)　松岡陽子マックレイン
『漱石研究年表』(集英社)　荒　正人
『新潮日本文学アルバム　夏目漱石』(新潮社)
『夏目漱石事典』(勉誠出版)　平岡敏夫・山形和美・影山恒男編
『漱石、ジャムを舐める』(創元社)　河内一郎
『ああ漱石山房』(朝日新聞社)　松岡譲
『元祖女性は太陽であった　平塚らいてう自伝』(大月書店)　平塚らいてう
『新聞記者　夏目漱石』(平凡社新書)　牧村健一郎
『内田百閒の世界』(教育出版センター)　真杉秀樹
『朝日新聞記者　夏目漱石』(立風書房)　宗田安正編

『新宿文化財ガイド』(新宿歴史博物館)
『ガイドブック　新宿区の文化財』(新宿歴史博物館)
『新宿文化絵図』(新宿区)
『開館記念特別展　漱石・八雲・逍遙』(新宿歴史博物館)

**写真提供**

財団法人日本近代文学館
財団法人神奈川文学振興会
藤田三男編集事務所

※写真の無断転用を禁ず

---

＊原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いて記述しましたが、
人名・引用文・史跡などの文化財の名称については、この限りではありません。

平成23年3月　(5版)発行
編集・発行　新宿区地域文化部文化観光国際課
160-8484
東京都新宿区歌舞伎町一丁目4番1号
Tel.03-5273-4069
印刷物作成番号　2010-24-2610